宗茂と閻千代

目指せ、大河ドラマ「立花宗茂と閻千代」

【問】市観光課観光推進係（☎0944・77・8563）

第5話

柳川藩主への復活

大名に返り咲いた宗茂

宗茂は、関ケ原合戦で敗軍の将となり、浪人の身となってから5年の月日が流れた慶長11（1606）年9月。ようやく2代将軍徳川秀忠に拝謁が叶いました。こうして長年の浪人生活を終え、奥州南郷（現在の福島県棚倉町付近）に1万石の領地を与えられ、大名の身分に復帰することができたのです。

宗茂が正式に「宗茂」へ

さらに慶長15年、宗茂は加増を受け、領地高は3万石となります。実は、この連載では煩雑さを避けるため、「立花宗茂」という名に統一して書き進めていますが、正式に「宗茂」と名乗るのはこの年からなのです。旧家臣に送った加増を知らせる書状に「かたじけなき仕合せ、御推量あるべし」と書いているように、このめでたい加増を喜んだ宗茂は、この機に改名したことが想像されます。これまで、波乱に満ちた人生の運気を切り開こうとするように、統虎、宗虎、正成、親成、政高、尚政、俊正と次々と名を変えてきましたが、「宗茂」となってからは生涯この名を使い続けます。

大阪の陣では将軍の軍事的相談役

南郷に領地を得た後も、将軍の側近く仕えるため江戸を離れることがあまりなかった宗茂に代わり、家臣の由布惟次、斎藤統安、十時惟昌、因幡宗糺らが在地で支配に当たっていました。この頃の宗茂は、秀忠の警護や江戸城の守衛としての役にあったようです。慶長19年の大阪の陣では将軍の軍事的相談役を務めたと言われるように、武人として高い信頼を得ていたことが想像されます。

田中家が断絶 柳川藩主として復活した宗茂

関ケ原合戦の後、筑後国は田中吉政の領地となりましたが、2代忠政に跡継ぎがないまま没してしまったため田中家は改易されることになります。そこで、宗茂に欠国となった筑後の柳川へ再封の決定が下されるのです。一度改易された大名が再び同じ支配地に封ぜられるのは非常に珍しいこと。この再封が実現した理由はさまざまな要因が考えられますが、宗茂の実直な生き方と彼を支えた人々との絆が、奇跡の復活に導いてくれたのではないでしょうか。

慶長5年の柳川城開城からちょうど20年後、再び大名として柳川城へ入城した宗茂。激動の時代をくぐり抜け、柳川藩10万9千石の大名家当主として新しい時代が始まりました。

出典：「東京と福岡（東京福岡県人会）、令和6年4月～9月」に連載された文章をもとに再構成したもの

新たな柳河藩の関係史料

3月27日、原田万紗子さん（82歳）が初代柳河藩主立花宗茂の兜の複製や藩関係史料約4800点を市に寄贈しました。贈られた品々は、昨年12月に亡くなった夫の良康さんが収集したもの。万紗子さんは「寄贈は夫の願いだったので、喜んでいると思う。歴史研究や大河ドラマ招致に役立ててもらいたい」と話しました。

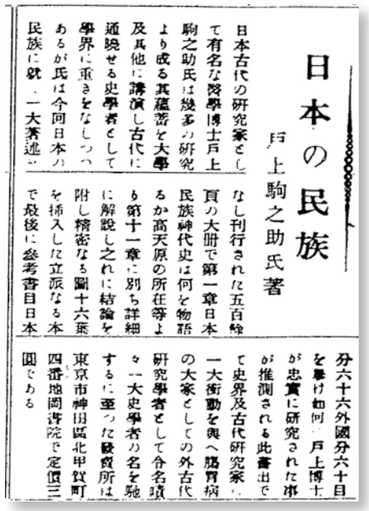
史料は柳川古文書館で調査や研究を進め、公開や展示については準備ができ次第、市公式サイトなどでお知らせします。

【問】同館（☎0944・77・1037）

兜や史料を寄贈した原田さん（右）

古代史家としても活躍した医師　戸上駒之助

柳川古文書館　白石 直樹



日本の民族

戸上駒之助氏著

日本古代の研究家として有名な醫學博士戸上駒之助氏は幾多の研究より成る其蘊蓄と大學及其他に講演し古代に通曉せる史學者として學界に重きをなしつつあるが氏は今回日本の民族に就て一大著述なし刊行された五百餘頁の大冊で第一章日本民族神代史は何を物語るか高天原の所在等より第十一章に別ち詳細に解説し之れに結論を附し精密なる圖十六葉を挿入した立派なる本で最後に參考書目日本分六十六外國分六十目を擧げ如何に戸上博士が忠實に研究されたか推測される此書出で て史界及古代研究家に一大衝動を與へ胃腸病の大家としての外古代研究學者として令名嘖々一大史學者の名を馳するに至つた發賣所は東京市神田區北甲賀町四番地岡書院で定價三圓である

【図版2】「日本の民族」刊行の記事（「柳河新報」昭和5年5月10日号）

【図版1】「日本民族の新研究」（著者から柳河新報社光行次雄に贈ったもの）

戸上駒之助は、足達春耕の長男として明治3（1870）年12月に柳河町で出生しました。同16年に中学伝習館に入学し、同20年に東京共立学校（現在の開成中学校・高等学校）に転じ、英語を専修しました。同22年に第五高等中学校（現在の熊本大学）に入り、さらに第一高等中学校三部（現在の東京大学医学部）に転じます。同28年に東京帝国大学医科大学に入学し、同33年に卒業。この間、同29年に戸上純庵の養子となり、同家の家督を相続しています。

卒業後は大学助手となり、ベルツ教師と三浦謹之助博士について内科を修めました。明治34年には小倉市立病院に院長兼内科部長として招かれます。その後、先輩が同院に招聘されたため、院長の座を譲って副院長として内科部長を兼ねました。その他にも企救郡々医、小倉市医や民間の生命保険会社の顧問医を嘱託されています。小倉市立病院在任中には、当時同地に軍医として赴任していた森鴎外とも親交があったようです。

明治37年、東京市京橋区岡崎町（現・東京都中央区八丁堀）に医院を開業したようですが、あまり詳しいことは分かっていません。翌38年に内務省医術開業試験委員となり、日露戦争時には千駄ヶ谷野戦病院に勤めたようです。また、同39年に養父純庵が亡くなると、養父の医院があった旭町の地を引き継いで開業しています。こちらは毎月15日に「出張診療」として活動していたようです。同42年にドイツ・ベルリン大学に留学し、実験生物学や生理化学、消化器病を学びます。翌43年に帰国すると、その後福岡の旧柳町（現・博多区下呉服町）で戸上胃腸病院を開業します。九州帝国大学に学位論文を提出し、大正5（1916）年に医学博士の学位を授与されました。

このように医師としての経歴を着実に築いていった戸上ですが、その一方で古代史研究家としての一面も有していました。昭和4(1929)年には、九州帝国大学史学会での報告を基にして「熊襲も優等民族」という記事を「柳河新報」に3回にわたって掲載しています。そして、同年「日本民族の新研究」（図版1）を、翌5年には代表的な著作「日本の民族」を出版しています（図版2）。戸上の主張は、日本人の起源は西アジアにあるという独特なもので、その受けとめは賛否両論あったようです。その後も戸上は「柳河新報」紙上で数回にわたって自説を連載しましたが、その晩年についてはよく分かっていません。

※表記は広報紙のルールで統一しています。